



1.3201
9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20
inch 1 2 3 4 5 6 7

24ColorCard CameraCrazy.COM

HUAJIE H.3201

APRIL 2013

保
安
1.390
会

現代軍部論

著 郎三井

安寧
1.390

省務内
11.4.1-
(版出通普)

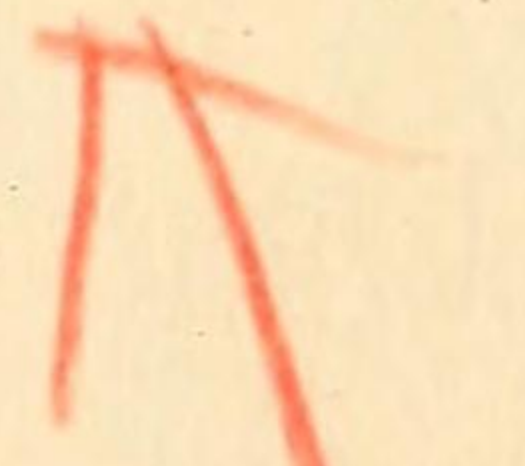
20セ

版社題問の日今

圖書課長

事務

官



54P.

相沢中佐ヲ得難キ人物ト
高々恤セルト云ハ不徳ナリ

削除ヲ成



本書日米思想ノ國內浸潤ニヨリ日本思想ヲ
混乱ニ導キイハコトヨリ説キ起シ。滿洲事変及勃発
ヲ契機トシテ日本精神ノ顯現ニタルコトヲ述ベ、
五、一五事件、國防ニ關スル陸軍パンフレット問題、
永田事件、二、二六事件ノ概略ヲ順次記述シ
テ其ノ間陸軍が何ヲ求メ如何ニ處シ又處セント
シタカヲ説明シ。今後陸軍ハ重要國策ノ實踐
ヲ要望シ、大陸經營ニ軍民一致努カスヘキテア
ルニ曰フ強ク主唱シアリ。不良箇所ト思料セラルルハ
莫ハ何シモ伏字ヲ用ヒアリ。

全体 安寧 不問 可然 哉



Nagai, Saburo.

54
胡除

12月6日

永井三郎著

現代軍部論

警部(公)

明治三十二年

22



今日の問題社版

12月6日

UA 845

No 25

1936

Copy 1

Asian

Japan

Page

LC Control Number



99 477635

例言

一、本書は、現内閣の方針であり、軍部はもとより、官民一致の要望である所の、軍民一致結束、庶政一新、皇國發展、國體宣揚の目的を以て、軍部論なる題下に、陸軍大尉永井三郎氏に執筆を依頼して上梓したものである。

一、時局深刻、國內一致して難局に當る必要ある際、やゝもすれば、盲説、流言、誣語の行はるゝ虞あるとき、重大なる使命に直面してゐる軍部の正しき姿を知らしめんとして、更に、更始一新の政治を斷行せんとして、ある現内閣の方策に國民の理解を深めんとして、特に本書を出版したもので、題名は、軍部論なるも、必ずしも終始軍部のみに關することを書かれたのではない。

一、本書は、現下の情勢より判斷して、著者に三度、訂正を求め、更に、全稿の三分の一以上を削除、改筆を加へて、著者の本意を、傷けた點もあり、讀者の不満足を招く點もあると思ふが、大方の諒察を乞ふ所以である。

一、本書が時局混迷の折柄、明朗化の一助たり得ば出版者亦幸甚である。

出版者謹言

序

日本の軍部は、その、本然の軍事部面に於て、世界無比的な、鐵の團塊そのものである。而も、世界的非常時局に處して、皇國の大使命を負ひ、東洋の平和、延いて世界平和のために、急迫せる經倫の遂行にあたつてゐる。而も、その對外經倫は、對内國策の徹底的皇國化の照應に待つて、始めて光輝燦然たり得る。

此の意味に於て、軍部が國政の一新を叫ぶこと久しい。然るに、部内上下一致の善處にも拘らず、内政に關する限り沈滞の打開に到り得なかつた。茲に於て、余は曩に『軍部論』なる小著を敢てし、

軍部の對内的重大地位に關し、軍部がその本然の軍事面に於てのみならず、對内的、政治面に於ても、渾然たる鐵の一體化を以て、眞に皇軍として、古今未曾有の時局に處し、國內的にも肇國の大義確立に邁進せんことを切望した。

然も、二・二六事件を契機として、皇軍は完全に政治面に於ても一體化の實を擧げつゝある。國政は一新的に飛躍の過程にある。軍部の支柱に於て、名實共に強力政治は兎にも角にも第一步を踏み出したのだ。次に來るものは、明確なる日本主義的指導原理の確立と其の指導原理下に於ける西洋文明機構の消化是正、即ち、現世的皇道文化の創造である。

日本は、今や、正に、三千年來の歴史的玉成としての特殊文化を

以て、歐米の文明文化を突き貫ぬいて、矛盾を揚棄した經濟機構の皇道的確立へ發程したのである。

全國民は、舉げて國際政局、殊に、東洋に於ける日本の重大地位を自覺すると同時に、國政一新の必要と、これに對する軍部の抱懷を知つて、緊揮一番、大いに自彊勵精すべきの秋であると信ずる。光明は赫々として、坦々たる大道の彼方に輝き出したではないか。

此の意味に於て、此の一文を大方讀者に捧げる所以である。始め此の文は、伊藤君の依囑により、書かれたものであつたが、種々の事情下に三たび書き直して、漸く上梓するを得た。そして、伊藤君は『現代軍部論』と題したいと申し出た。しかし、私には先きに『軍部論』なる著述があるので、如何かと思ふが、此の小著は、その『軍部

論』とは内容に於て何等重複する所がないので、伊藤君の意にまかせたわけである。

幸にして、此の小著が、今日、政府、軍部、國民一致の要望たる軍民一致結束、庶政一新、皇國發展のために、何等か寄與する所あれば、本懐である。

皇紀二千五百九十六年

著者記す

目次

序説、日本思想を混亂せしめた歐米思想	(二)
一、皇道文化と相容れざる物質文明	(二三)
二、資本主義的恣意の發展	(一九)
三、廣義國防への積極的關心	(三)
四、現状打開への前進	(三六)
五、滿洲事變に於ける日本精神の顯現	(三六)
六、五・一五事件の勃發	(三三)
七、五・一五事件の公判	(三六)

- 八、無爲に終つた齋藤内閣……………(四三)
- 九、近代國防に理論づけた陸軍パンフレット……………(四六)
- 一〇、永田中將刺殺さる……………(五三)
- 一一、九月の肅軍と其の實績……………(五四)
- 一二、永田事件軍法會議……………(五六)
- 一三、二・二六事件より廣田内閣成立までの經緯……………(五八)
- 一四、陸軍の抱懷する諸國策……………(六六)
- 結び、日本の大陸經營……………(七八)

現 代 軍 部 論

永 井 三 郎 著

序 説 日 本 思 想 界 を 混 亂 せ し め た 歐 米 思 想

わが日本に於いても、わうしうたいせん歐洲大戦が聯合國側の勝利に歸して、しやうりデモクラシーの思潮が決定的となつた一方、かくめいロシアに於ける革命の成功は、他方に、まいしマルクシズム乃至レーニンズムの思潮の急激な關心を唆るに到つた。

そして、ほんしつじやうせいぢきこうその本質上政治機構へ、そしてたいしうてき大衆的な假面を装ひつゝ、支

配層への有利な傾向となつて、専ら支配階級の便宜のために國內に浸潤し、また制度化さるゝに到つた。

これに反し、マルクシズムは經濟機構内の労働大衆の間に、一部新進知識階級分子の媒介によつて浸透し、社會的反抗氣勢を助長し、階級的觀念を強調してゐた。

抑々このデモクラシーなるものは、資本主義經濟機構の發展につれ、その資本主義的思想である個人主義的自由主義から當然歸結さるる政治思想で、所謂ブルジョア經濟機構に隨伴する宿命を持つてゐるものであつた。

即ち、資本主義經濟の發展につれ、小規模にギリシヤ時代に先行したこの思潮は、十八世紀的、形而上學的、唯物主義思想を基調として、世界的な領域にまで再生せしめらるゝに到つたものである。

しかも一方マルクシズムは、哲學的に此の十八世紀的唯物主義を克服し、即ち、形而上學的唯物主義から、ヘーゲルの觀念論的辯證法を經過し、その後を受けて唯物主義との連關に於て、觀念論的辯證法を顛倒した方法を基調として、資本主義的經濟機構の精密な分

柝に始まり、階級闘争を歸結し、プロレタリア獨裁によつて、次時代への秩序を創造せんとする日本の嚴然たる歴史的特殊性を無視した思想なのである。

そして兩者共、資本主義を生みの親とする思想なのである。

従つて資本主義が相當の段階に進めば、當然その生みの子たるものも、世界の風潮と共に生れ出づるは自然の勢なのであつて、日本に之等の思想が種々な弊害を伴ひつゝ、浸透し來たつたのであつた。

しかし、それ等の思想は、西洋に於ては自然的に發生し、資本主義の發達と共に、時を追ひ序を踏んで、漸次段階的歩みを續けて來たから、生え抜きとしての自然さと特長とを持つてゐたが、日本に在つては、單に飛躍的に、これを輸入したに止まり、土壤必ずしもその正常な發育に適してゐなかつた關係上、土壤として存在する東洋精神との混淆に於て寧ろ思想混亂といふ非常な弊害を醸すに到つた。

一、皇道文化と相容れざる物質文明

抑々、アルフレッド・ウエーバーによれば、歴史的な出来事を、三つの領域に區別する。
社会過程、文明過程、及び文化運動がそれである。

社会過程は、常に大きな身体的な生活的統一體、廣義に於ける民族によつて支持されてゐる。

それは一つの歴史體から、次のそれへと傳承されるものであつて、ある恒常的な主體の繼續的な歴史ではない。

文明過程と、文化運動は、社会過程が人間の本能的意志的な力から由來してゐるのに對して、いはゞ意識的な過程を意味するものであるが、兩者の動向は同一ではない。

文明過程は、あらゆる歴史體を貫いて進行する。

これは若干の制限をさへ加へれば、高昇する直線の像を以て象徴される。

此の過程には進歩の觀念が妥當する。

この過程の内容には、種々の智識的な作業が含まれるが、全體的に見ると、それは、存在の前進的な合理化を意味するものである。

この過程を理解するために、用ひられるのは発見の範疇である。

文明の價値は創造されず、発見されるものである。それは智識的な運動が、前提的に與へられてゐる場合、既に豫め存在してゐるものであつて、人間はたゞ、これを意識的に、その存在の中に攝り入れるだけのものだからである。

この範疇的な構造から、必然的に文明の歴史的な運動法則が発生する。

この合理的な存在領域は、部分毎に構成されてゆき、その獲得された以上は、永久に失はれることはないものである。

これはあらゆる人間に妥當し、この故に、一つの歴史體から、他の歴史體へと本質的に何等の變化を加へられることなく、傳承される性質を有する。

それは人類の全歴史を通じて、一直線をなす普遍的な過程である。文化運動は、これと正に反對の性質を有してゐる。これにおいては、発見の代りに創造の範疇が現はれる。

普遍妥當的な必然的な、いたるところに傳達することの出来る有用物から成る世界のかはりに、人間の精神的な本質を啓示し、これに独自の他へ傳達することの出来ない内容を

有つ多數の象徴が、こゝに出現する。

純粹な文化的創造を、その母胎たる歴史から切り離し、これを移植したり、又は繰り返したりすることは不可能である。

そして、この範疇的構造は、その歴史的経過の特有な法則を發生せしめるものである。この過程においては、文明過程におけるやうに、不斷にそして斷片的に發見された財が蓄積されると云ふことはない。

それは閉鎖された世界である。それは一定の民族の精神と結合し、これと共に興り、これと共に滅する。個々の創造は突發的に出現する。

これにも法則性が認められる場合があるが、その時の社會過程の發展段階に照應する。社會過程と文化運動との間には、一種の平行性が認められる。此の三つの大きな綱によつて、歴史的な生起は編み上げられるものであると云ふのである。

即ち、資本主義經濟を生める社會は、利益社會の相當段階高きものであり、近代國家を生める社會的根底は、これまた集合社會として、相當高度のものであり、資本主義經濟機

構の如きは、文明過程の最高の所産であり、一方我が日本の皇道文化、惟神の大道は、文化運動の民族的、歴史的、成層的玉成乃至創造として、世界に尤も誇り得べき所産であるといはねばならぬ。

由來、日本の皇室は、集合社會、利益社會以後に於ける支配者として諸外國に於ける王室の如く、侵略的事實によつて、民の上に君臨したるが如きとは、全然其趣を異きにするのであつて、日本民族がその共同社會態時代に於て、仰き親しみたる先天的な、典型的な權威であると同時に、嚴然たる歴史的玉成であつて、後世儒佛文明の輸入によつて、日本の社會も集合社會化し、利益社會化し、兵農の分離、武家政治の發生等によつて、漸次、支配形象の發達を見るに到つたが、我が皇室は常に嚴然として、支配體系を超越せられて共同社會態の先天的な權威として、民族から仰ぎ親しまれつゝ、よくその御位置を保持されて賜ふた。

そして、その間、我が文化は惟神の大道を、天皇信仰と云ふ事實の上に、父長制の下に自然國家の展開たる國家的家族制を、益々洗鍊し、無限なる上下の親愛結合そのものである

る所の一君萬民、君民一體の道德觀を玉成しつゝ、儒佛の輸入、文化を包攝消化し盡して日本文化を世界無比の特異性に於て樹立したのであつた。

然も、明治維新は、歐米の利益社會に發生し、高度文明體系として發展し偉大なる物質文明の機構を背景とせる、近代國家的歐米の先進帝國主義の壓迫を契機とした皇道文明の飛躍が齎したところの精神主義的變革であつたのである。

即ち、過去の民族的沈滯を破つて、日本民族は、歐米帝國主義との餘儀なき直面によつて、その精神主義的な文化の傳統を發揮して、民族的文化運動の、猛然たる飛躍を結果したのである。

そして、その必然的所産が民族優秀性の發揚であつたのである。而も、その民族の優秀性は、當時段階的な、遙かな後進性にも拘はらず、歐米資本主義を、僅かな年限に於て完全に取り入れ盡す契機となつた。

然し、かくして、取入れられた資本主義機構は、短年月の間に歐米諸國に對抗し得んがために、近代裝備の不可避的必要から、皇道文化によつて、消化され融合さるゝ暇なく、

歐米の文明そのまゝの形に於て取り込まれた關係上、その資本主義文明機構が擴大されれば擴大されるだけ、それだけ、皇道文化と相容れざる發展を遂げてしまつた。そして、その歐米文化的所産乃至影響が、前章述ぶる所の所謂思想混亂なる貌に於て、大正から昭和の初期にかけて發現するに到つたのであつた。

二、資本主義的恣意の發展

元來、日本の資本主義は、先にも一寸述べた如く、明治維新にあつて、日本資本主義が未だ自己独自の立場に於て、歐米の資本主義に追隨すべく發程するには、餘りに未熟であつたのを、民族的優秀性の極度の行使によつて、今日の情勢に盛り上げて來たものなのである。

日本資本主義は、歐米諸列強に追及すべく、只々まつしぐらな一途を批判もなく、突進したることによつて、獲得した所産である。

従つて、明治、大正を通じて、たび／＼日本主義運動が之等歐米資本主義機構、並にそ

れとの連關乃至上構である所の歐米文化に對し、再吟味を要求したにも拘らず、殆んど省みられずに、寧ろ歐化の一途を辿つたと云ふのが事實であつたらう。

然も、大正三年から七年迄續いた歐洲大戰は、日本資本主義を飛躍的に發展せしむるに到つたので、日本資本主義は、殆んど歐米と對等の地位にまで追及し得たのであつたが、斯かる過去の發達過程は、一方から之を見れば、その機構の歪曲をも意味する。

そして、此の歪曲は二重に現はれた。大正九年の經濟恐慌、昭和二年の金融恐慌、昭和四年の世界恐慌に引き續く諸恐慌と同時に思想の大混亂がそれである。

財閥的支配階級の恣意と爲政治家のデモクラシー的墮落、大衆の反抗的プロレタリア化、等々、蕩々として生半嚙りの歐化思想は、經濟恐慌と錯雜して、徒らな偷安乃至反撥を事とした。

そして、結局、政界デモクラ的安逸消極の愚衆政治化し、日本に於ける高等學校と云ふ高等學校を通じ、大學と云ふ大學を通じ、マルクシズムは、若き智識階級へ瀰漫し、勞働大衆層へ浸透を逞しうするに到つた。

マルクシズムは、資本家と労働者との階級的對立を前提として、國家を以つて、單に階級のその時々（じじい）の力の關係の表現、即ち、上部構造（じやうぶこうさう）にすぎないものだとしてゐる。従つて、かくの如き思想の當然として、國體乃至皇道と云ふが如き日本の尊嚴なる特殊性（せいせい）を認めず、それは經濟の段階性（後進性）の反映に過ぎず、發展と共に消えてなくなるべき封建的殘滓（さんさい）だとしてゐる。

そして、實にかくの如き誤れる思想が、マルキストたると、たらざるとを問はず、漸く日本人を蝕みはじめた一方、所謂ブルジョア階級と云はるゝ一般支配者層も、また十八世紀的唯物思想乃至個人主義的自由主義的思想によつて、其の恣意を現はにし、顯著的な階級的恣意の道程を、非國家的に歩む傾向を露骨にして來た。

三、廣義國防への積極的關心

しかも、斯かる中に世界經濟恐慌の深刻化は、列強間の關係を、重苦しい雰圍氣の裡に閉ぢ込め、國際政治經濟は頓に緊張して來た。

それにも拘らず、政黨政治家は、かゝる社會現象乃至世界の現實に對し、殆んど無爲にして、徒らに財閥の傀儡化し、その議會は腐敗墮落の極を盡し、廟議は偷安追従をこれ事とし、國民は、舉げて不景氣に畏縮してしまつた。

幣原外交が國際協調の名に於いて、無能極はまる敗北主義を續け、日露戰爭に高價なる犠牲を賭して、東洋平和のため確保し得た大陸に於ける生命線的立場からすら、突き落されんとするに至つた。

しかも張學良に媚笑して、商租權問題、鐵道問題の懸案解決を、僥倖せんとするに過ぎざる有様であつた。

これは當時の狀勢よりして、無理なき事として、許さるべきかもしれぬが、日本皇道文化進展に多くの障害となつた事は事實である。

凡て、これ三千年來、玉成し來たつた燦然たる皇道あるを忘れ、徒らに物的な歐化思想に拜跪追隨したが故の結果であらねばならぬ。

實に、我が日本に於いても、當時、皇道即ち日本主義の影薄く、徒らに物質的西洋文明

の機構のみが、その偉大な系統と組織とを誇り、皇道文化は、これ等機構を其の内に消化包攝すべくして、却つて壓倒され盡さんとするかにさへ思はれた。

日本民族の優秀性にも拘らずこの沈滞は、かゝる理由に於いて見らるべきであつた。かかる環境の、あらゆる不利な條件に直面して、近代國防の觀點より、軍部ならずとも心ある識者は忍び得ざるものがあつたのは當然であらう。

抑々、國防は國家生成發展の基本的活力の作用と見るべきであるが、歐洲大戰以前に於いては、國防は専ら軍備を主體とし、武力戰を對象とする極めて狹義なものであつた。

歐洲大戰以後、學藝技術の異常なる發達と、國際關係の複雑化とは、必然的に戰爭の規模を擴大せしめ、武力戰は單獨に行はるゝことなく、外交、經濟、思想等、各部門に於て、戦ひが展てん併かいさるゝことゝつた。

従つて、かゝる廣義國防の見地からすれば、當時の我國情は實に恐るべき危機に直面して居たといふべきである。

勿論、國防が近代國防と云ふ體系化に於て、廣義化したことは、歐洲大戰に於いて經驗

した事實の成果であるから、軍部が、軍部として國家の全活力を綜合統制すべく、その國防的見地から組織化に努力しつゝあつたことは、歐洲大戰直後からのことで、軍部として當然のことであり、今日世人の考ふるが如く、何も事新らしいことではない。

しかし、當初は資源局、軍需局、國家總動員計畫と云つた様な、平時準備的關心で、世界經濟の恐慌、それに續く日本國內の經濟恐慌、思想の混亂等、一般社會的現實、即ち、政治社會面に直接關係をしないものであつた。

然し、當然國防的關心が切迫すればする程、平時準備的紙上計畫的關心のみに止まり得ず、その經濟恐慌、思想混亂等、一般政治、社會面に對し独自の關心を持たねばならなくなる。

然も、思想混亂の性質たるや、軍部が抱懷し實踐し來れる一君萬民、君民一體の皇道主義とは正に對蹠的で、戰時に於けるそれは、獅子心中の虫そのものであるに於て、到底無關心ではあり得なくなる。

況んや、思想混亂の結果する所、必然的に、その精神主義の故にのみ、皇軍を皇軍たら

しめ、世界にその無比な偉力を發揮した所の正義に立脚する國民的理想、旺盛なる國民精神、鞏固な團結力、それらの破壊たるに於いておやである。

加ふるに、隣國たるアメリカとロシアに對する關係は、ロンドン條約に於ける比率的桎梏によつて、ソヴェエツト第二次五ヶ年計畫への發程に依つて、このまゝの無爲な對立は自然的な彼等の日本抑壓力の増大を意味するばかりでなく、絶大な自然資源をもち、その自給自足力を最大に發揮し得る可能性をもつ、兩隣國に對し、日本が、その獨立性を維持するためには、不可避免的に自給自足的な物的安定を必要とさへした。

自給自足のない處に、意志は自立し得ないである。

然も、自給自足的確立のため、大陸政策遂行の必要は、斯くの如くでありながら、大陸の生命線的立場からさへ、然も支那人によつて突き落さるゝまでに追ひつめられてゐた。

このまゝ、無能怠慢な推移を續けていつたならば、世界第二十四位の狭小な領土面積の中に、徒らに支、ソ、米につぐ第四位を誇る一億民族を擁して、英、米、佛、伊、ソ、それぞれ、一三・一四・九・一七・八・なる人口密度に對し、一平方里中一四一人の高密度

ける國內諸政の一新は、實に昭和せうわ日本飛躍ほんひやくの岐路であつた。

茲に、現状げんじやう打開だかい一新論しんろんは軍部をはじめ、各方面かくほうめんより高唱せらるゝと同時に、その後、その反映として、諸事件しよじけんが起きるに到つたのであるが、順序じゆんじよとして、次章先づ滿洲事變を述べ、解説かいせつを進めることゝしやう。

五、滿洲事變に於ける日本精神の顯現

かかる國民こくみんの沈滯ちんたい、そして改革的思想の潜熱せんねつが、それぞれの方面に於いて飽和ほうわに達した時、突如國內は勿論、世界を振撼しんかんしたのが、九月十八日であつた。

この滿洲事變まんしゅうじへんは、起るべくして起つたことでは勿論もちろんあつたが、小泉三伸氏の『青眼せいがんに構へて』と云ふ文章が、よく要えうを摘つままんで眞に徹して書いてゐるので拜借はいしやくしやう。

『明治維新めいぢいしんの天下の大勢に成れるは勿論もちろんなるも、大勢を活用して、敢然かんぜん實行じつかうに任じたものは、薩長二藩であるとの筆法ひつぽふは、移して以つて昭和維新せうわいしんに應用おうようすべく、固より之れ我が皇道精神の光顯くわうけんに外ならずとしても、光顯作用くわうけんさように勇猛精進したものは、殊に軍部ぐんぶ、殊

に陸軍である。

明治維新の奇効は薩長に光り、昭和維新の偉勳は軍部に輝く、この昭々乎たる事績は萬世永久に歴史を照らすであらう。

應身國出現を以つて、昭和維新の大業となす見解は、蓋しこの邊に創まり、これより或は識者の修正を経るかも知れぬが、滿洲國成立を契機として、日本の國策が確立したと云ふよりも、日本の國策が確立して滿洲國を樹立したと云ふの適當なるべく、國際聯盟脫退も、ワシントン條約廢棄も、齊しく、國策の恢弘に外ならざる所以に想到し、日本、滿洲、眞身、應身、二身不離の一體とする政治意識を結晶し、誰かゞ云へる國を擧げて焦土とするも辭せざらんとする絶對絶命的責任を覺悟してゐる態度は、恰も、即ち軍部の功勞を感謝する擧國一致の意思表示ならざるを得ない』

そして、實に滿洲事變は、中堅層によつてイニシアチブをとられた所に、尖鋭な時代性を持つのである。

従つて、滿洲事變は、當然前提的に國內問題を内包してゐたのである。

實に、滿洲事變は國際問題であると同時に、それと同等若しくはそれ以上の程度に於て國內問題そのものでもあつたのである。

だから、當時、根本前新聞班長は書いてゐる。

『今次の滿洲事變は、金融資本の桎梏の下に、瀕死の状態に陥りかけてゐる我が國民生活を救ひ、我國の經濟狀態を、日本本來の姿に引き戻すべき昭和維新の營みである。』

斯くて、一君萬民の比類なき我國體の精華を發揚し、三千萬民衆を新に光澤し、皇道國家の基礎を、政治的にも、將た經濟的にも、磐石の泰きに置かんとする大事業が、即ち、滿蒙問題の解決である。

而して、その重要なる要素が、我經濟機構の更生に置かれてあることを認識し、我國民全體が、此の點に深甚なる關心を持つことが、最も肝要であると思ふ』

と云つてゐるが、事件にイニシアチブをとつた關東軍では、滿洲國に理想を思ひ切つて顯現し、日本内地の經濟機構に、模範的に反映して見せやうとさへ、最初の意圖として

抱持してゐたと云はれる。

今も滿洲國に、殆んど引き續き全力を舉げて活躍してゐる板垣少將は、今日、なほその確信に聊かも變りはないのだらうとも推察される。

斯くして、滿洲事變は、確かに日本精神の爆發と見らるべきであつた。そして、實に關東軍はその雷管であつたのであつた。

此の時を劃期として、俄然、惟神の大道は、即ち、日本精神は、赫灼たる光彩によつて照らし出さるゝに到つた。

皇道文化は、其の本然の歴史的成層の頂點に於て、強烈な力を集中し來たつた。

正に明治以後を通じて、全力的に、而も盲目的に、輸入し終つた西洋文明、即ち、資本主義の偉大なる機構を皇道文化の中に、包攝消化せねばならぬ文化運動の俄然たる機運に際會したのであつた。

換言すれば、資本主義機構の齎したものは、唯物的な宇宙觀であり、世界觀であり、人生觀であつた。そして、文化は經濟を下構とするイデオロギーにしか過ぎぬとせらるゝ。

而も皇道文化は、斯かる下構の反映ではあり得ない。

日本民族は、三千年來の歴史的事實によつて、神國的肇國の思想精神に基いて、論より證據、事實を以つて、世界に其の無比なる國體を、無比なる文化運動に依つて、如實に示すべく蹶起したのである。

日本では經濟のあらゆる機構は、精神の大道の中に包攝消化され、皇道の支配下に、整調されねばならないのである。

世界のあらゆる國の残らずが、所謂、社會科學なるものに従つて、唯物史觀の上に其の途を辿らうとも、我が日本は、經濟の段階性の故の、特殊性を主張するのではなく、皇道文化の如實なる顯現によつて、其の固有な精神主義的な、特殊性を世界に宣布し、以つて世界の平和と幸福とのために、崇高なる使命を果さねばならないのである。

六、五・一五事件の勃發

しかも、滿洲事變は國民に異常な衝動を與へ、之れによつて國民は、俄然、本來の民族

精神に目醒め、日本主義は荒木陸相就任以後のその指導理論とせられた華やかな皇道論の高唱に伴れて、異常な展開を來すに到つたが、既に、歐米諸國と同程度とは云はない迄も殆んど追及し得た程度に其の資本主義機構を完成し、金融資本の段階に到達し、世界なみに其の世界的恐慌を免れ得ない状態にあつた我が日本は、既に、歐化の病、膏盲に入つて日本主義精神の大衆的勃興と云ふ事實を以つてしても、尙、かゝる經濟機構を、下部構造とする上部構造である所の政治に對して、如何ともなし能はなかつた。

滿洲事變の勃發は、單に國民的精神緊張と云ふ事實を伴ひはしたが、その精神的緊張はそれが政治面への作用に於ては、依然たる墮性に從つて、ブルジョアの無能無爲の自由主義的、金融資本主義的範圍を越えやうとはしなかつた。

茲に、日本主義的精神が、皇道文化の歴史的成層の頂點に、政治的な方法論的な、文化運動に發展したのは當然である。

五・一五事件は、餘りによく知れ互つてゐるが故に、更めて、こゝに叙説を要しまい。

然しながら、此の事件は非常に小規模なもので、軍隊とは關係なく、海軍の少壯將校と士官候補生と、一部民間農民有志との挺進的行動ではあつたが、單に計畫に止まつたものではなく、如實の姿に於て、國民の前に事實を展併した。

此の事件は、血盟團事件と連續して起されたものであつたが、井上日召の統制下にある全部民間同志のみから成る血盟團は、最初、海軍側同志と共に、二月十一日を期して、政界財界並びに特權階級の巨頭暗殺を決行し、革正運動の狼火を擧げ、以つて國家改造運動の機運を醸成せんとしたのであつた。

しかるに、偶々上海事變の勃發に遭ひ、將校側は他日を約して、血盟團側は茲に目的を變更し、前衛行動として、上層政界、財界、特權階級の代表者と目される知名の士二十餘名に對し、一人一殺主義の計畫實行に移つたものであつた。

蓋し、彼等の思想に従へば、所謂指導階級の墮落、專横を戒め、これが廓清を期するに、財界並に政界の巨頭を斃し、暴力による破壊行動によつて、恐怖時代を現出せしむるに如かずとなしたからであつた。

そして、之に續いて其の後陣こうちんたりしものが、五・一五事件じけんであつたが、その動機及び目的とする所のものところは、近時我國の狀勢は、政治、外交、經濟、教育、思想及び軍事等あらゆる方面に行詰りを生じ、國民精神こくみんせいしんまた頽廢を來したるを以つて、現狀げんじやうを打破するにあらざれば、帝國を滅亡めつぼうに導く恐れあり、然して、この行詰りの根源は、政黨、財閥及び特權階級互ひに結託して、たゞ私利私慾しりしよくのみに没頭し、國防を輕視し、國利民幅を思はず、腐敗墮落したるに由るものなりとなし、この根源こんげんを艾除して、以つて國家の革新かくしんを遂げ、眞の日本を建設けんせつせざるべからずといふにあつた。

そして、斯かる主張しゆちやうの裏には、權藤成卿の君民共治主義くんみんきやうちしゆぎ、橋孝三郎の國民共同體王道國家こくみんきやうどうたいわうだうこく農本建設主義かうほんけんせつしゆぎ、大川周明の『天に則る王道を地に行はん志』と云つた様な思想體系が主流りゆうをなして、藤井少佐ふじのせうさ、井上日召、橋孝三郎以下の氣魄きぱくの結晶けつしやうがあつた。

而して、彼等はその公判廷こうはんていに於て、具體的な事實として、天皇政治確立てんわうせいぢかくりつ、統帥權問題、農漁村中小商工業者の疲弊、政黨政治の救ふべからざる墮落、財閥の專横、支配階級しはいかいきふの偽瞞もん的態度を問題とし痛憤つうふんした。

七、五・一五事件の公判

かくの如き五・一五事件に對し、海軍將校側公判に於いて山本檢察官は次のやうな論告をなした。

『本件は、被告人の個々に依り、多少の認識を異にして居りますが、要するに海軍々人陸軍々人互ひに黨を結び、及び民間の同志と相結託し、爆彈其の他兵器を執り、軍人は孰れも軍服を着用し、白晝公然、首相官邸に闖入し首相を殺害し一方に於ては内府官邸及び警視廳を襲撃し、爆彈を投じ、拳銃を發射し、二三の巡查其の他を殺傷し、政黨の本部及び二大銀行に爆彈を投じ、並びに帝都附近の變電所を破壊し、一時之を暗黒状態に陥らしめ、依つて戒嚴の宣告せらるべき非常の状態を惹起せしめ、戒嚴令下に軍政府を樹立し、以つて現時の政治機構及び經濟機構の革新を試みんとするの企圖に出でたるものと認むることが出来るのであります』

と、その計畫が述べられてゐる。そして、事件の動機から農村の窮狀、倫敦條約に關す

る認識を問題とし、事件發生の原因から、軍人と政治に就いて批判し、暴力行爲の絶對に排すべきを主張し、法を司るものは斷乎として、國法守護の天職を盡さざるべからざることを述べ、極刑を要求した。

之れに對して、高須裁判長は、

『現下の狀勢を目し、國民精神廢頹し、建國の本義日に疎んぜられ、いはゆる支配階級たる政黨、財閥、特權階級は、腐敗墮落し、國家觀念に乏しく、相結託し私利私慾に走り、國政を紊り、國防を輕視し、外交の不振、農村の疲弊、思想の惡化をまねく等、事態憂慮に堪へざるのみならず、滿洲事變に伴ふ國際情勢の變化、及びロンドン海軍條約の結果、對外關係の危機又切迫し、帝國は一九三六年の交において、未曾有の難局に逢着すべく、今にして國民の覺醒を促し、舉國一致時弊の刷新を計り、建國精神に基いて皇道を宣揚し、皇國日本の眞姿を顯彰するに非ずんば、邦家の前途眞に憂ふべきものあり、然も、事態急迫を告げ、合法手段をもつてしては到底焦眉の急に應ずるの暇なきものと認め、遂に、一切を超越して、直接行動に訴ふるのやむなきを決意し、自ら國家革

新のための捨石となつて、まづ之等支配階級に一撃を加へ、その反省を促すと共に一般國民を覺醒奮起せしめ、以つて國家革新の氣運を醸成せん事を期するに到れり』といふてゐる。

又、陸軍々法會議に於いても、勾坂檢察官は、

『統帥權の節度に反し、軍人の本分に背き軍紀を紊りたる』
は重大非行なりとせざるを得ずと前提して、

『被告人等は、豫て士官學校に於ける訓育指導に依り、軍人精神を涵養し、國體の特長建國の本義を明かにし、皇室及び國體に關する思想信念を強め、有事の際、奮つて國難に赴き、喜んで大君の馬前に斃るゝの殉國精神を體得し、更に、書籍其の他に依り之が思想信念を鞏固ならしめ、一面我國現下の内外の狀勢を知るに及び』といふてゐる。
そして、又、西村裁判長は、

『被告人は、孰れも陸軍士官學校在學中、同校に於ける訓育に因り、軍人精神を涵養し、皇道の眞髓と國體の尊嚴とに對する不拔の確信を體得し、有事の日欣然として起ち、慷

慨死に赴くの信念愈々鞏固となるに至りしが、昭和六年九月下旬より翌七年二月頃迄の間に於いて、或は歩兵第三聯隊付陸軍歩兵中尉菅沼三郎の許に出入し、同人より一君萬民を基調とする天皇觀及び國體觀、現時の腐敗墮落せる政治經濟其他一般の社會狀態、明治維新志士の言行、我國現下の狀勢と、軍人の使命等に關する所説を聽き、我が國體思想、社會問題等に關する書籍及び各種新聞雜誌を閲讀し、或は同輩間に於いて、互に意見の交換を行ひ、茲に我國現下の狀態を目し、皇道扶翼の精神は日に衰へ、國體の尊嚴は日に疎んぜられ、所謂支配階級たる政黨財閥及び特權階級は、腐敗墮落し、相倚り相助け、私利私慾に没頭し、國防を輕視し國政を紊り、外國威の失墜を招き、内民心の頽廢農村の疲弊を來せる等、皇國の前途頗る憂ふべきものあるのみならず、特に、滿洲事變の勃發に伴ふ國際情勢、及び倫敦軍縮條約の結果、我對外關係の危機は、一日の偷安を許さずとし、速かに此等時弊を革正し、以つて、建國の精神に基く、皇國日本を確立するため、國家革新の必要を痛感し、而も、叙上焦眉の事態と被告人當時の境遇上、到底合法手段を以つてしては、之が革正を期し難しとし、遂に自ら國家革新のため捨石

となり、直接行動ちよくせつかうどうに依り、是等支配階級の一角を打倒だたうし、支配階級及び一般國民ほんこくみんの覺醒を促し、以つて國家革新の機運きうんを醸成ちやうせいせんことを欲し云々』と述べられてゐる。

此の事件じけんに對し、當時の陸相荒木大將は、

『上陛下に對し奉り、國民こくみんの一人としても、陸軍の當事者たうじしやとしても、誠に恐懼きようくに堪へない次第しだいである』

『一方純眞なる青年せいねんが、かくの如き舉措きよそに出でた、その心情しんじやうについて考へて見れば、涙なきを得ない。名譽のためとか、利慾りよくのためとか、又は賣國的行爲ではない。眞しんにこれが皇國くわうこくのためになると信じてやつたことである』

『又、本件によつて、團、井上、犬養の諸氏の如き得難い人材を失うた犠牲ぎせいに對して、我々國民は大勇猛進だゆうまうしんを以つて、一路皇國日本の建設けんせつに邁進すべきである。今我國の内外情勢を達觀するに、前門ぜんもんの虎とらに後門の狼のみでなく、空には強鷲の爪つめをみがきて飛翔ひしやうせるあり、地には、熱火の沸騰ふつとうしてゐる中に立つてゐるのが、日本の姿ではないか。幾多權威ある先輩せんまいの革靈かくれいに對し、又、純眞無垢じゆんしんむくなる青年の憂國いうこくの志にそらべく、我々舉國一

致、全力を盡して、この難局を打破することに進むことのみが、吾人の責務であると信ずる。重ねて云ふ。陛下の宸襟を悩まし奉つたこの事件の契機に國民は反省し、また三省して、以つて將來再びかゝる不祥事なからむことを、期せられるやうに切望にたえざる次第である』

と述べ、大角海相は、

『唯、何が彼等純情の青年をして、この過をなすに到らしめたかを考へる時、肅然として三思すべきものがある。今後、我等軍人は愈々聖旨を奉體して、軍紀を肅正すべきはもちろん、一般日本國民としても、お互に反省して、將來、再び斯くの如き過誤に陥る者なからしむる様、最善の努力を拂はねばならぬと考へる。余は、本件の歸趨について、これを云爲すべき立場にあらざるを以つて、罪とか刑罰とかの問題を離れ、唯、彼等青年の心事に想到する時、涙なきを得ぬのである』
と語つてゐる。

八、無爲に終つた齋藤内閣

實に、五・一五事件は、天下への一大警鐘であつた。

軍法會議は、其の独自の見解に基き、且つ國民大衆の意向を反映して、前述の如く被告の心情を諒とする所あり、事件の重大性を國民大衆と共に、克く認識した所であつたが、果して、其の後に於ける國政一新への熱意は、事實の上に具體化し得たであらうか、そして、よく財閥、政黨、特權支配階級に猛省を加へ得たであらうか。

齋藤内閣が、五・一五事件を契機として、舉國一致の型態を以つて出現した。

然し、齋藤内閣のその指導精神は、陸相としての閣僚荒木大將の華やかな活躍と皇道的主張にも拘らず、時局の抑壓鎮撫と云ふ糊塗的方策を出でたものではなかつたか。

斯かる時勢に則して、内閣の使命は、實に強力に國民を結束し、國力の充實宣揚にあらねばならなかつた。

然も國力充實宣揚は、國體並に建國精神の高唱に依り、三千年の歴史性の上に、その玉

成を結果した皇道文化、即ち、其の核心たる魂の鐵の如き結合を導き大和民族本來の面目に於いて、資本主義經濟機構の包攝消化にあらねばならなかつたのである。

由來、明治以來、資本主義文明は、歐米に於ける發達過程そのままの機構をあるがままに受容れて來た。

その結果は、此の文明機構による日本本來の文化乃至精神の敗退であつて、所謂財閥資本家、爲政家、特權支配階級の恣意的腐敗墮落、一部大衆の反逆的なプロレタリア化、即ち、精神乃至觀念のイデオロギー化であつた。

唯物的資本主義的頽廢が結果した極度の國家不安であつた。

實に、此分で進んだなら、我が日本も遂に西洋文明の機構下に克服され盡して、優秀なる民族性を持ちながら、文化的に、精神的に、滅亡する外はなかつたのである。然し、由來、精神は、魂は、爆發する。

文化運動は、飛躍的なものである。

滿洲事件は、日本精神の外への爆發であり、そして、内外相呼應して、燦然たる皇道文

化の基調きてうを示した。

三千年來の歴史的成層の頂點ちやうてんに、威光燦然、而も包容力ある惟神かんながらの大道たいだうは、其の姿を顯現した。

そして、實じつに、齋藤内閣に課せられた使命しめいは、此の皇道文化の嚴存の把握はあくによつて、偉大なる物質的機構力ぶつしつてききこうりよくそのものである所の、資本主義機構しほんしゆぎきこうに於ける現段階たる金融資本きんゆうしほんの重壓桎梏しやくこくから、經濟的に、政治的に、國民を解放すると同時に、皇道精神くわうていせいしんによる經濟機構、政治機構の漸進修正ぜんしんしゆせいであらねばならなかつた。

即ち、蕩々たる西洋的物質文明せいやうてきぶつしつぶんめいの、本來的な東洋的とうやうてきに日本の精神主義ほんてきせいしんしゆぎによる克服であらねばならなかつた。

そして、當來の政治形態せいぢけいたいは、經濟機構は、そして、行動形態かうどうけいたいは、啻に、日滿兩國間に於てのみの正道せいだうと云ふ如きものではなく、實に、將來しやうらい、世界各國に之を擴充くわくじやうせしむべき、基本原則の上に樹立じゆりつされねばならなかつた。

即ち、日本肇國の精神せいしんないし乃至思想ししやうに基き、その崇高なる精神思想を、現世界資本主義げんせかしほんしゆぎ段階だんかい

に對し、如何に、その崇高性を永久的基本原則として、具象化し指導原則たらしめねばならぬかにあつた。皇道精神を基調とせる昭和一新、及び、それが持たねばならぬ基本原則の確立である。

然し、齋藤内閣は、舉國內閣を偽裝して無爲に終つた。

勿論、其の間、過去に於ける産業合理化の完成を基礎として、軍需インフレ、労働強化爲替低落等が幸して、日本生産界の飛躍、貿易の活況等があつたが、それは、必ずしも、高橋財政の故ではない。寧ろ、高橋財政は斯かる幸運に恵まれつゝ、資本主義的政策の強化を行つたに過ぎなかつた。

そして、その健全財政と云はるゝものも、産業貿易界の活況も、かならずしも、樂觀し得べき種類のものでなく、一日の偷案を、恣にしてゐるに過ぎない種類のもので、辛うじて三五年の維持が可能なるに止まり、早晚、高橋財政も、行詰まらざるを得ない事情にあつた。

農村も、循環的な景氣や、天候天災の錯雜したその時々の景氣や、不況に、頭を撫でら

れたり、横ビンを打ちのめされた思ひに、一喜一憂を經過したが、所詮救はるべき事態には置かれてゐなかつた。

そこには、慢性的窮乏と、小商工業者の慢性的經營困難が連続した。

岡田内閣に到つては、同じく舉國一致を偽装はしてゐたが、より無能な弱體內閣に過ぎなかつた。

斯かる性態の下に、軍部の名に於て、其の新聞班から發表されたのが、彼の陸軍パンフレットと云はるゝ、『國防の本義と其強化の提唱』であつた。

九、近代國防に理論づけた陸軍パンフレット

滿洲事變以來、國民大衆は、巨大な軍部の氣魄に神秘性を感じつゝ、何かしら、巨象の輝かしい眼の底光りを見るが如く、ひたすら、軍部に望みを囑した。

かくして、勿論、軍部は其の本然の職責の前に、國防の本義に基く當然の所置としてではあつたが、前述の様な、國民大衆の興望をも考慮に容れたと思はるゝ、彼のパンフレット

トを發表した。

そして、國民大衆は、國防の本義を認識し得ると同時に、軍部の皇道的大乘的抱懷を知つた。

時情に則したジンテーゼとしての行動性を持ち、然も、本質的には日本固有の世界無比な文化原則を指導原理とする軍部を、一糸紊れざる陛下の眞の陸軍とし、眞の海軍とし、更めて敬意を表しつつその傳統精神に於いて、訓練に於いて、はたまた、組織に於いて陛下に對し奉る忠誠と、國民に對する赤心と、國體宣揚の信念とに期待し、刮目し、仰視した。

然るに、皇道の抱懷を持しつつも、遂に、その經綸を齋藤内閣に強ふるに到らずして、病に倒れた荒木陸相を繼承した林陸相は、此のパンフレットを出したことによつて、陸軍の一體化を如實に示すと同時に、鐵の如き意氣を顯揚したかに見えたが、貴衆兩院議員の大部が、此のパンフレットに反撃の色を示した時、林陸相は、敢て軍部の信念を主張する代りに、よそ目には蹈晦を、これこととしたかに見えた。

然し、それには故のないことではなかつた。

林陸相の政治手腕は、勿論、問題とされねばならぬにしても、たゞ從來、軍首脳部としては、政治的であつた場合もあるが、軍の全階層に於いて、政治に關心を持つたことはなかつた。

然し、政界の腐敗墮落は、皇國の危機をすら胚胎するかの状態に到つた。

茲に、已むにやまれず、見るに見かねて、所謂大乘的に、自然發生的に、軍部全階層に湧き上つた聲が、行動が、政治領域に屬する種類のものであつた。

従つて、それは自然發生的であつただけに、自然兒的素朴性から免れ得なかつた。

と同時に、其の方法は舊來の政治家の型と異なるは當然で、軍部は軍部としてのその本領に基き、独自の範疇をもつてゐた。

そして、その基調たるものは、勿論、現時の國際緊迫の情勢に照應した國防を、第一義とした精神に置かれた。

私は、軍部に寄する言葉として、私の既刊『軍部論』なる小著の卷頭に、次の様に書い

たことがあつた。

『沈黙の金は、軍部の偉大相である。而して、斷乎たる實行力の故にのみ沈黙の金は、層一層の光彩を添へ得るのである。』

然も、その軍部が滿洲事變、其の他を前提せるかの如く、沈黙の行相を以つて突き出した彼のパンフレットである。茲に軍部の神秘性が發生する。

世上一部のもの、之を呼んでファツシヨとなすものがある。

然し、吾人はその神秘性が事實に於いて、文字通り神秘的にして、三千年來の皇道光顯に寄與する巨火たらむことを希望する』と、

そして、又、本文中強力政治論なる題下に、

『然し、現政治機構、詳しく云へば、資本主義經濟機構と不可分の政治型態——否、資本主義機構の上にノツカツてしまつてゐる政治、經濟の支配下にある政治、ブルジョア政治、そして、結局金融資本獨裁下の政治、それ故にこそ陸軍パンフレットが、陸軍の指導原理として問はれつゝ、しかも、林陸相を消極的態度たらしめ、公論にまで押し進

めしめ得なかつた岡田内閣の政治に於いて、——公論を低調ならしめておくことを便利とする岡田内閣の政治に於いて、如何にして公論を喚起せんとするのであるか。

外國では唯物的な革命が、少くも、ファツシヨでなければならなかつた。然し、前にも云へる如く、我が日本に於いては、それは徹底精神主義であり、大乘的である。

上御一人を始め、萬民悉くが八百萬の神々の御加護の下に行ふ祭政である。

そして、それを契機づけるものは、その精神に於いて力に於いて、組織に於いて、日本主義の純粹を保持してゐる軍部の強化された統制下の體格的な強力な發動であらねばならぬ。

この發動のみが、公論を力強く明るく喚起し得やう。

斯くして始めて、名實共に強力な内閣が、明確な指導原理を以つて、公論の上に經濟支配的な政治を施行し得るのである。

茲に到つて、始めて、調査局は天下の偉材の集結を以つて、獨立して國內大改造の參謀本部として、新日本の築造に、根本的のブレイン・トラストの能率を發揮し得る機會

を得べく、日滿兩國は、勿論、日滿支の緊密な、親善連繫の實を擧ぐべく、大國策の樹立に遺憾なきを得るに到るのである。

然し、軍部の強化された統制下の、一體的發動と云つたからとて、直ちに、軍人政治を意味するものではない。

軍部は、その一體化を以つて、その責任に於いて、單に、軍事面、外交面だけでなしに、國內大改造と云ふ部面に於いて、即ち、政治的全面、且つ根底的なるものに對し、強力な支柱として立つことで、其の全面的、且つ根底的なるものに對する支柱的立場を明確にすることを意味する。

もとより、英雄的人物が首領であり、閣僚であることは必要であるが、問題は、軍人が首領であり、閣僚であることではなく、軍部一體の強力性が、その全責任を以つて、偉大なる政治家に非常時の手腕を振はしむるにある。

英雄が時代を生むと云ふよりも、時代が英雄を生むのだ。

ドンナ英傑的人物が出て、今の政黨では英傑としての手腕は、施せないのである。

只、軍部の統制と強力のみが、英雄に、英傑的手腕を振はしむることが出来るのである。

そこに輝しき公論が湧き、強力政治があり得る。

そして、革新があり得る』

××、××××××××××××××××××、××××××××××××。
××××××××××××××××××××××××××××××××。

一〇、永田中將刺殺さる

眞崎教育總監の軍事參議官への轉出は、單に、更迭といへば何の奇もない事實である。

しかし——事實はいざ知らず——××××××××××××××××××。陸軍では

省部規定に於いて、統帥の問題は軍政權に左右されないことを認めてゐる。

而も、この規定は、××××××××××××××××××。それは、××××××××××××××××

××××××××××、××××××、××××××××××××××××××××××××××××××××

彼は急進を好まず、軍内閣を不當とする思想にあつた。

彼をして存在せしめば、彼は彼としての道を歩み、何事をか爲し得たであらうが、彼は規狀維持的な人物として乃至は、將來への野望家として疑はれたとも察せられる。

八月十二日事件は、智脳に於いて得難き一人物と、氣魄に得難き一人物とを同時に兎にも角にも失ふに到つた。

一一、九月の肅軍と其の實績

軍首脳部は其時々の責任者によつて清軍と云ひ、統制と云ひ、肅軍と云つて政治面に於ける軍統制に協力し皇軍の玉成に努力して來た。

永田事件によつて、林陸相は重ねて緊急師團長會議を開催した。

林陸相は、荒木前陸相と會見し、懇談三時間、大乘的見地に立つて國軍の明朗化をはかり、以つて皇軍の志氣を振作し、軍紀の嚴正を保持すべき事につき、意見の一致を見たる

後、重ねて非公式軍事參議官會議の結論として、

が今日の時代に尤も適應してをり、理屈にのみ偏することが、却つて物事の進行を阻止する結果に陥るのだと云ふことを話してゐる。

要するに、現代は實行の時代である、陸軍でも、色々この案が出来上つてをり、その案がそれぞれ立派な案で、残されてゐるのは行途のみである。自分は、斯う云ふ見解と信念とを基礎とし、實行して行くつもりだ。幸ひ部内鍊達の士の助力を得て、所信に向つて勇往邁進する覺悟を持つてゐる』

と云ふ所信を愉快としたが、川島陸相の行途は必ずしも此の言葉の如くならなかつた。國體明徴の第二次聲明前後並に豫算の編成に際しては、大いに果斷的に軍の所信を實行すべきではなかつたのであらうか。

一二一、永田事件軍法會議

軍の統一一體化は、全軍の切なる希望である。然も、國民もまたそれを熱望して已まな
いところである。

永田事件は、この時に起つた晴天の霹靂であつた。
強烈な天地間の放電にも比すべき閃光とさへ見られた。従つて、此の公判は非常な重大性を内包してゐた。

單なる殺人傷害事件乃至用兵器上官暴行といつた種類範疇のものではない。××××××××重點とせる政界、財界等、支配層全範圍に亙る動きを包括してゐる。(以下四百字削除)

凡そ、明治以後長足大規模の發展を遂げたる資本主義經濟機構は、その物的な機構の根底性、大規模性の故に、凡ゆる文明文化を其の機構に榮養づけられる、第二次的のものとして考へんとするのである。

しかも問題は、此の大規模にして、根底的な深刻な根張りとなつてしまつた資本主義機構を、如何に是正修正し、本來の大和民族の文化、即ち、皇道文化の中に消化包攝するかの問題である。

今にして、之を行はずんば、皇道文化は、却つて經濟機構の中に飲み盡されてしまふであらう。

野中大尉以下、村中、磯部等民間の四名を加へ、千四百數十名の將校下士官兵は、野中大尉自決し、殘餘すべて歸順して、茲に一大事件は兵火を交ふるの不祥事を結果せず、鎮定した。

そして、次に來るものは内閣首班の奏請、組閣、而して時局の收拾であらねばならなかつた。

西園寺公は、二日出京、宮内省に入つた。之と同時に、陸軍では今回の事件を契機として、展開し來たつた未曾有の重大時局に直面して、この際こそ國政の全面かつ根本的大刷新を斷行し、難局打開に邁進すべきであるとの確乎たる認識下に、全陸軍の總意を盛つた所の、時難打開の鐵案を決定したと報ぜられた。

それは、第一に、今回の不祥事件惹起の原因を徹底的に糾明し、この際、一切の行きがかりを一氣に清算し、軍内部に對する一大肅正を斷行し、軍不明朗化の原因を艾除し、建軍の眞面目に立歸ると共に、現下の重大時局を擔當すべき、次期内閣の首班たるべき人物については、特に陸軍として最大の關心を注ぎ、この人物銓衡については、從來の形式に

一切拘泥せず、その資格の絶対必要條件として、新事態に對する謬らざる認識の下に、國家諸般の機構改革を實行し、これが適正の運営をなすに、十分なる識見と實行力を具有すべきを強調せんとしてゐると云ふのであつた。

そして、次期内閣に要望すべき具體的政策としては、

- 一、國體明徴の徹底的顯現
- 一、國防の充實完遂
- 一、國民生活の安定
- 一、外交の刷新

で廣義國防の見地から、舊套を一擲し、全面的に革新的たるべきを要請すとせられた。

西園寺公は、四日近衛文麿公を後繼首班に奏請したが、近衛公は拜辭した。

その拜辭の事情としては、西園寺公は、奏請に先立つて近衛公を宿舎に招き、

「此際君に骨折りを願ひたいと思ふから是非承諾して呉れまいか」

と内意を叩いたに對し、近衛公は、即座に、

「健康も思はしくないし、又、この重大時局を擔當する力もないから、お斷りする」と明確に辭退したが、老公は重ねて、

「今日は非常時局には相異ないが、君の健康が悪いと云つても、自愛して是非共受けてもらひたい』

と受諾方を懇望した。

然るに、近衛公は飽迄老公の希望を容れず、次いで時局の認識問題に關し、兩者の間に懇談が重ねられたが、二時間の長きに及んで、尙、意見の一致を見ないままで、會見を終り、老公は、この際、何れにも偏せざる人物と云ふ點を銓衡の眼目とする見地からして、近衛公を奏請、近衛公は之を拜辭したと云はれる。

依つて、西園寺公は再び銓衡に入り、近衛公奏薦と同様の方針により、輓近政界の一部にわだかまる右翼的潮流に乗つて、急進的政治動向の展開を企圖する如き人物を好まざると共に、一方右翼的の潮流に高壓的に對處して、一舉に時局の解決を求め、人物を採らず、この兩者の中間に坐して、不即不離の裡に、時局打開を企つるが如き人物をと云ふの

で、廣田氏の起用を見た。

或る新聞は、西園寺公が、事件後の時局を毒下しが完了したあとの收拾と見てゐると云ふことを、嘘か真か報じてゐた。

然るに、廣田氏は大命を拜受し來るや、その組閣方針として、

一、對内非常時局を打開し、肅軍の徹底をはかることを最大の急務とし、

二、各方面の人材を網羅したる、名實兼備の舉國一致の實現、

三、今日の難局に處して斷乎として所信を實行し、内外の時艱を克服し得る力を有する強力内閣の組織、

四、議會政治尊重をモットーとする意味に於いて、政黨に十分敬意を拂ひ入閣援助を懇請すること、

五、新鮮明朗の氣を注入するため、出来るだけ因縁情實に捉はれず、從來の型に捉はれざる新人物を集めること、

而して、選ばれた最初の閣僚顔振れは、驚くべき若朽に非らざれば、屑々たる自由主義

的人物の羅列であつた。

世人も、此の大事件の次に來る内閣は、名實共に國內革新を斷行し得る強力内閣の出現、局面打開を期待してゐたのに、廣田内閣の顔ぶれを見て、多大の疑問を持つた至り、廣田氏の時局認識の有無を疑ふに至つた。と同時に心ある士は時局の前途に其の憂慮を深めたのである。

果して、寺内大將は談話の形式を以つて陸軍首脳部と協議の結果次の決意を聲明した。『此の未曾有の時局打開の重責に任すべき新内閣は、内外に互り、眞に時弊の根本的刷新、國防充實等、積極的強力國策を遂行せんとするの氣魄と、其の實行力とを有するところが絶対に必要であつて、依然として、自由主義的色彩を帶び、現状維持、または消極的政策により、妥協退嬰を事とする如きものであつてはならない。積極政策により、國政を一新することは、全軍一致の要望であつて、妥協退嬰は、時局收拾する所以に非ずして、却つて事態を紛糾せしむるのみならず、將來大なる禍根を貽すものと云ふべきである。右の趣旨に合致しない内閣が、果してこの内外に互る非常時艱を克服し得るであ

上は聖旨せいしに應へ奉り、下は時勢の要望えうぼうに副たがひたいと期する次第である』
と云ふのであつた。

斯く、廣田内閣は組閣そかくに於いて、難航五日を續け辛うじて成立せいりつした。

一四、陸軍の抱懷する諸國策

今や廣田内閣は、馬場藏相ばばざうしやうを委員長として、政綱政策案せいこうせいさくあんを決定中であるが、此の稿かうは軍部論なるが故ゆゑに、その政綱を問題としやうとは思おもはない。

海軍の意向は、殆んど決定的けつていてきに採用されることであらうが、こゝで一應おう、陸軍の國策とする所の梗概かうがいを見ることにしやう。

先づ、第一が國體明徴こくたいめいちやうの問題である。軍としては、この際これの徹底的顯現てつていてきけんげんを要望してゐる。

岡田内閣に於ける教學刷新評議會けうがくさくしんひやうぎくわいに、之を押し込めて、單に觀念くわんねんてき的に明徴を期きせんとしたるが如ごときは、日本の國體の意義の何ものたるかを理解りかいせざるものでなければならぬ。

かりでなく、時局の何たるかをも認識せざる態度とせねばならぬ。

由來、日本は物心一如を本義とする精神主義を基調とする國風である。

現世に於ける國體明徴の本義は、實に有り難き三千年來の惟神の大道の如實の光顯により、皇猷扶翼の徹底的實踐により、全國民を舉げて、餘りに明白な世界資本主義經濟機構の動向に對し、ドイツやイタリーの如く、窮まつて通ずる反撥的尖銳精神主義を以つて、而も歩一步見えざる手に導かれて、袋小路に顔を打ちつけるが如き事なき様、高所に立つて先見し、達觀し、大觀し、以つて經濟機構の皇道的機軸轉換を行ひ、洋々開け行く大日本の將來を創造せねばならぬのである。

そして、億兆その所を得ざるものあらしめざるに到ると云ふ境地に、國民の全體を徹底的に導くことが、その究局の到達點であつた。政治も、經濟も、法律も、教育は勿論、あらゆるものが、その全範疇に互つて、惟神の大道を基調に吟味再検討せられ、物的な個人主義的な、自由主義的な、舊來の輸入文明の規範を揚棄して、皇猷扶翼を基調とした正純、名譽、廉恥、犠牲、獻身、奉公の諸徳を忠孝友愛下に高揚せしめ得る所の、道義の世界建

設に向つて整調せいてうされねばならない。

従つて、之が爲めには實踐じつせん的に、最も權威ある機關が必要ひつえうであると同時に、それによつて徹底的てつていに、明徴方策を具體的に躊躇ちうちよなく、實施する内閣首班並びに閣僚かくれうの熱意と誠意とが必要ひつえうであらう。

此の誠意、熱意による結束けつそくの強弱こそ、實に強力内閣、弱體内閣じやくたいないかくの質的判別しつじゆんの基準であらねばならぬ。

第二、國民生活こくみんせいくわつの安定は、國體明徴てつていはつげんの徹底發現てつていはつげんとして、國政一新こくせいつしんの中核ちゅうかくをなすもので、陸軍としては廣義國防の見地けんちより、進んで現状を打開だかいし、國內の諸情勢に照應して、遲滯なく改革かいかくを斷行すべしとなすのであるが、陸海軍の要望がななくとも、又、廣義國防くわうぎこくぼうの見地からのみならず、内閣ないかくは、當然、此の問題に對し、第一義だいいぎ的に努力せねばならぬ性質のものである。

現經濟機構げんけいざいきこうが個人主義自由主義を基調として、其の發達はつたつの極點を越え、加速度的かそくどてきに降り坂にあるがため、既に今日こんいちに於ては、中小商工業者、農民等が全般的ぜんぱんてきに凋落衰退し、然も

一方には富の偏在を招來して、綜合國力は著しく低下し、剩へ國民大衆の生活を不安ならしめてゐることは、既に常識となつてゐる。

然も、從來、政府は何等斯かる動向に對し注意を拂つてゐなかつた。

茲に、政治家としてのブルジョア化を見のがすわけには行かなかつたのである。

一昨年發表された、所謂陸軍パンフレット『國防の本義と其強化の提唱』によれば、この事に關し、

『國民の一部のみが、經濟上の利益特に不勞所得を享有し、國民の大部が塗炭の苦しみを嘗め、延ひては階級的對立を生ずる如き事實ありとせば、一般國策上は勿論、國防上の見地よりして、看過し得ざる問題である。』

之がため國民が等しく利己的個人主義的經濟觀念より脱却し、道義に基く全體的經濟觀念に覺醒し、皇國の理想實現に適應する如き、經濟機構の樹立に邁進することが望ましい』とし、

1、肇國の理想、皇國の使命に關する深き認識と確乎たる信念とを把持せしめ、皇國內

外に瀰漫せる不穩、過激なる如何なる思想に對しても、寸毫も動搖することなき堅確なる國體觀念と、道義觀念とを確立せしむること。

2、國家及び全體のため、自己滅却の崇高なる犠牲的精神を涵養し、國家を無視し、國家の必要とする統制を忌避するが如き、行動に出でんとする極端な國際主義、利己主義個人主義的思想を艾除すること』
を國防思想上必要とし、之がためには、

(イ) 現經濟機構は、個人主義を基調として發達したものであるが、其の反面に於いて、動々もすれば、經濟活動が個人の利益と恣意とに放任せられんとする傾があり、従つて、必ずしも國民全般の利益と一致しない。

(ロ) 自由競争激化の結果、排他的思想を醸成し、階級對立觀念を醸成する虞がある。
(ハ) 富の偏在を來し、國民大衆の貧困、失業中小産業者、農民等の凋落を來し、國民生生活の安定を庶幾し得ない憾みがある。

等、改善整調の必要を力説し、經濟機構是正の方法として、

1、建國の理想に基き、道義的經濟觀念に立脚し、國家の發展と國民全部の慶福を増進するものなること。

2、國民全部の活動を促進し、勤勞に應ずる所得を得しめ、國民大衆の生活を齎らすものなること。

3、資源開發、産業振興、貿易の促進、國防施設の充備に遺憾なからしむる如く、金融の諸制度竝に産業の運営を改善すること。

4、國家の要求に反せざる限り、個人の創意と企業慾とを満足せしめ、益々勤勞心を振興せしむること。

5、公租公課を眞に公正ならしむる如く、税制の整理を擧げてゐる。

要するに、全能力を總動員して、一元的運用により機構機軸の轉回を必要とし、又、それによつてのみ、之等は可能であるとしてゐる。

そして、斯くして綜合的國防力の充實向上は、現下最緊急の事なのである。

廣田内閣に對する實行具體案は、これ等原則に依つて自ら定まることであらう。

第三、外交刷新は、當然、友邦滿洲國の内容充實をはかり、北支聯盟の結成成長を援けて、成るべく早い時機に於いて、對支問題の全面的解決を期すると同時に、日滿共同防衛の立場から、緊迫してゐる滿露、滿蒙に對處しなければならぬ立場にあるのだが、之がためには、どうしても、積極的自主外交の強力性によらざる限り、其の打開整調は不可能とせらるゝ。

殊に、露國が必要以上の兵力を滿露國境に集中し、國境紛争の絶えざる事情に對しては積極的態度によらぬ限り、事態の解決は不可能とさへ見られてゐる。

露國が七十六の歩兵師團を有し、十三の騎兵師團、二、二〇〇〇の飛行機、一、五〇〇の戦車を現有し、一九三五年末には八十五の歩兵師團、二十の騎兵師團、それぞれ、四千の飛行機と戦車を有するまで、軍擴の計畫が完遂されてゐることを想ひ、その強行計畫經濟による重工業（軍事力）能力の飛躍的著しき増進を知るとき、彼が保有する資源の豊富と共に、外交の上にも、軍作戦の上にも、戒心を要すべきものがあると云はねばならぬ。

彼は、鉄鐵せんてつの一四、五〇〇千吨、鋼鐵の一六、〇〇〇千吨、石炭せきたんの一三五、〇〇〇千吨、石油の三〇、〇〇〇千吨、飛行機ひこうきの四、〇〇〇機、戦車せんしゃの四〇〇〇機、機關車の一、九〇〇輛、貨車くわしゃの九、〇〇〇輛、自動車の一六一、五〇〇臺、トラクターの一五四、三〇〇臺の年額現生産力ねんがくげんせいさんりょくを有する。

斯く、露國は今や強大なる近代きんだいてきぐんび的軍備を中心とする綜合國力ぞうがふこくりょくの異常な發展を遂げ、比較的有利な國際環境こくさいくわんきやうの中に在つて、極東政策は、愈々積極且つ露骨ろこつとなつて來てゐる。外蒙は、新疆は、既に其の手に完全くわんぜんに歸してゐるのである。

しかも、支那は聯蘇容共政策れんそようきやうせいさくによつて、一部赤化の容認ようにんをすらしても、抗日の舉きよに出やうとし、一方歐米依存主義によつて、以夷制夷いせいせいの傳統政策から、今もつて目醒めざめやうとはしない。

唇齒、輔車くわんけいの關係にある支那の宿命的な、致命ちめいてき的な不統一と、混亂と、無節操むせつさうと、無自覺は今にして之を救はずんば、東亞とうあの致命的禍根でなければならぬ。

しかも、支那しなに對し如何に協調主義が輕侮たしやういぐわの對象以外の何ものでもなかつたことは、餘

りに最近の苦い經驗である。

東亞の盟主とし、救世主として、正に日本は獨自積極的な外交によつて、東洋平和の確立をせねばならぬ。

否、そうするより外に、東洋の平和は、保持し得ないのである。外交の刷新は、即ち、こゝにあると云はねばならぬ。

第四、國防の充實、かく露國の第二次五ヶ年計畫の着々たる進行、極東軍備の老大化、交通網の完備等により、露國が漸く挑戰的な態度に變りつゝあるを見るとき、日露の關係は正に逆睹し難いと云はねばならぬ。

國防の充實は、廣義國防の完遂と共に、世界の大勢、極東の情勢に則して、今更多言を要しないことである。

而して、要するに、之等諸國策の切迫せる最緊急の實現に對しては、國家としての力を極點にまで發揮する必要がある。然るに、從來國家の力は、舊來社會的な力の連累者となる傾向を持ち、西洋文明、資本主義經濟機構の趨く所、階級的支配、即ち、政治のブルジ

ヨア化の傾向が顯著とすらなつた。

然し、今や國家は此の歪曲から、斷然、自己を解放せねばならない。經濟も、政治も、法律も、等々、すべて國家独自の見地から、規範づけられねばならぬ。

そして、國家行動の増大は、政治の皇道化であり、必然的に、政治の經濟への優越であり、而して、經濟の皇道化であらねばならぬ。

そこに國民生活の安定、外交刷新、國防充實は、當然、期待され得るのである。

即ち、國民的な輪廓に於いて、政治は精力的に遂行されるに至るのである。

最高の叡知と、決斷とは、皇猷扶翼の意義に於いて、萬世一系の天皇に對し奉り、最高の奉公を遂ぐべき内閣諸公の皇道政治の信念に與へられてゐるのである。

而して、強力政治の實は、こゝに存する。

『一死奉國』を廣田首相は聲明した。果して彼れ強力の實を發揚し得るや否や。

思へば、廣田内閣は、其の成立の始めから強力の實を喪失したかにさへ見られてゐた。彼は當初、組閣の方針を自由主義的な原則に出發せんとした。

自由主義經濟統制と云ふが如きも、徒らに資本獨占の強化を結果し、階級對立の助長に終る本質性を有するものなのである。正に戒むべきかなである。

然かも廣田氏は始め此の自由主義を原則とするかに見えた。しかし、組閣中途して、各方面の情勢を顧慮する所あり、廣田氏一流の、ねばり強さを以つて、轉回をなしつゝ組閣を完了したのである。

凡そ、強力と云ひ、弱體と云ふも、要する内閣首班に立つものゝ確乎不動の信念と、熱烈なる氣魄とによつて決するものである。

中心たるべきものが、強い信念、敢爲の氣力を以つて立てば、凡ゆる力は此の核心に集中し、綜合せられて、強力な結合が生れる。

そして、其の信念の強力性は、閣僚を通じ、政務官、事務官を通じ、一波萬波、強力な放射體の本源たるものである。

聞くところによれば、廣田首相は、其の性格、剛毅、果敢、一流のねばり強さを以つてよく萬難を排して進むと。果して此の言眞なりとすれば、幸ひであるが、徒らな現状維持

と現狀打破との板挟みとなつて、一時的應機じてきおうきの政治を事とし、根本的解決こんぽんてきかいけつの強力なる政治の斷行を躊躇するものあらんか、禍は其の足下より起るものと知るべきであらう。

結び、日本の大陸經營

筆者は、大陸政策たいりくせいさくについて、北支事件の意義いぎとして、切迫せる我が反動恐慌はんどうきょうかうを打開する絶對唯一的要件とし、漸く現はれかけた我が過剩生産の危機ききを打開し、延ひて大規模の新發展景氣を齎もたらす効果かうくわを認めつゝ、それが、單なる資本主義的經濟の進出乃至更生かうせい以外に終ることなく、より多く大規模の景氣を、國民大衆的のものたらしめることを希望きぼうし、本質的に國家こくかの發展に、生々寄與せねばならぬと思ふものである。

嘗て、筆者は松岡滿鐵總裁まつをかまんでつそうさいの起用を見た時、次の様に書いたことがある。

「高橋藏相は今、金融資本閥きんゆうしほんはつの守本尊である。その中で育ち、その隅々まで熟知せる高橋藏相のイデオロギーが、徹頭徹尾ブルジョア、殊に金融資本主義的きんゆうしほんしゆぎであるのは止むを得ない。

然し、高橋氏は性格的に恬淡無私である。軍部的イデオロギーを以つて、實際に則して、松岡總裁が押す所に、高橋氏の融通無碍、しかも、經財方面に於ける蘊蓄は、松岡氏のためにも、高橋氏のためにも、新境地を創り出すだらう。とは云へ、問題は結局、國民一般の利益を基調とせる統制經濟の原則と、資本主義的自治的統制經濟の原則の衝突は、免るべからざるに歸する。

高橋藏相が、果して、此の領域の仕事をして爲し得る大政治家であり、大政治であるかどうか』

と書いたことがあつた。高橋藏相は、今や幽明境を異にしてゐる。而して、日本經濟界では、滿鐵の社債五千萬圓の消化が出来ずに居る。

松岡總裁の驚くべき、尤も消極的な計畫の現はれとしての五千萬圓の社債の現状が、既に然り、現状のまゝでは、我が大陸經營は寒心に堪えないものがある。

思ふに、今や貿易界の好調に有頂天になつてゐる間に、日本の經濟界は、其の頂點を越えてゐるのである。

金融資本家等は、所謂悪性インフレを、極度に保身的な意味から恐れてゐる。輸出も行詰りつゝある。

そこに滿洲經濟の行詰りが、當然、隨伴して起つて來るのは、寧ろ宿命である。

しかも、滿洲國のみならず、北支開發及び政治工作の必要は、目睫の緊急事として迫つて來てゐる。

しかるに、滿洲國にすら、逡巡する金融資本家等の態度は、自己保存の立場から、寧ろ消極を通り越して、進展防止的ですからある。この態度によつて、我が大陸政策は驥足を拘束されねばならぬ現狀である。

しかるに、凡そ北支工作の重大性たるや、世界の運命に關する種類のものである。

日本を大陸にしつかりと結びつけ、全支那をして我國と文字通り唇齒輔車の關係に結合せしめる轉回軸たるものは、實に北支そのものであつて、内に昭和一新の契機たり、外に東洋人の東洋たる東洋の平和確立の根底たる所であつて、北支工作の成否は、日本の運命に拘はると共に、誤らば世界の運命に關はるものなのである。

しかも金融資本家は、營利第一主義の故に、自己保存の立場から、此の重大性に目醒めて居らぬ。

しかし、運命は全日本をして、茲に目醒めしめねばならぬ重大立場にある。誰か、かかる認識に於いて安閑たり得やうぞ。

爲政家は、國民は、舉げて眞劍に内外時局を認識すべきである。勇猛に實踐すべきである。

(皇紀二五九六、三、一三日)

四月

丁巳

午三時

刻

昭和十一年四月一日印刷
昭和十一年四月五日發行

『現代軍部論』

定價金二十錢



著者 永井三郎

發行者 伊藤隆文

東京市芝區田村町四丁目十八番地

印刷所 三陽堂 青野印刷所

東京市芝區田村町四丁目二番地

發行所

東京市芝區田村町
四丁目十八番地

今日の問題社

振替東京五九七四八番

電話芝(43)三〇〇七番

發賣所

東京市神田區通神保町 上田屋書店
大阪市北區堂島上二の二五 新正堂書店

◇ 目 書 行 刊 社 題 問 の 日 今 ◇

古 磯次郎著	澤 海軍豫備會商決烈せば？	價 送一〇	清 水 近代國防と ソヴェート・ロシア (絶版)	價 送一〇	陸軍 パント 經濟戰略・思想戰略	價 送一〇	秋 造 政局はどうか？	價 送一〇	松 二 山 農村はどうか？ (絶版)	價 送一〇	高 吉 橋 インフレーション下の 金融財政はどうか？ (絶版)	價 送一〇	阿 隆 夫 佐 景 氣 は 廻 る	價 送一〇	海軍 省梅 五・五・三廢棄をめぐる 列國の動向を探る (絶版)	價 送一〇	陸軍 パント ロシアは如何にして 極東に迫るか (絶版)	價 送一〇	陸軍 パント 重壓下の日本と國防の強化	價 送一〇	阿 子 島 内閣審議會とは何を するか (絶版)	價 送一〇	蓑 喜 田 天皇機關説を爆發して 國民に訴ふ (絶版)	價 送一〇	永 造 松 滿洲國皇帝を語る	價 送一〇	松 男 下 軍部前線に躍る人々	價 送一〇	野田 豐 株 式 界 の 前 途	價 送一〇	楠 公 研 密寶大楠公の遺訓書	價 送一〇
-----------	------------------	----------	--------------------------------	----------	---------------------	----------	----------------	----------	-----------------------	----------	---------------------------------------	----------	----------------------	----------	---------------------------------------	----------	------------------------------------	----------	------------------------	----------	--------------------------------	----------	-----------------------------------	----------	-------------------	----------	--------------------	----------	---------------------	----------	--------------------	----------

熊 健 翁 崎 運 に 乗 る 法	價 送二〇	蓑 喜 田 一木樞相牧野内府の 替冒思想を糾弾す	價 送一〇	松 男 下 軍部を裏から覗く	價 送一〇	國 防 編 列強は如何にして支那を食ふか	價 送一〇	高 清 橋 處 世 一 家 言	價 送一〇	藤 道 田 東京附近夏山の旅	價 送二〇	野田 豐 著 投資・利殖の必携	價 送一〇	永 造 松 豐 太 閣 の 處 世 術	價 送一〇	松 男 下 林 銑 十 郎 と 眞 崎 甚 三 郎	價 送一〇	村 太 郎 著 重 臣 ブ ロ ッ ク の 正 體	價 送一〇	管 節 雄 著 陸 軍 の 智 腦 九 人 男	價 送一〇	金 太 郎 著 日 本 憲 法 の 精 神	價 送一〇	松 男 著 下 川 島 義 之 と 渡 邊 錠 太 郎	價 送一〇	小 一 郎 著 林 軍 部 と 國 體 明 徵 問 題	價 送一〇	小 治 譯 林 ジ ヤ ク ソ ン 式 強 體 健 康 法	價 送一〇	三 夫 著 鳥 制 裁 下 の ム ツ ソ リ ー ニ 没 落 か	價 送一〇
----------------------	----------	--------------------------------	----------	-------------------	----------	-------------------------	----------	--------------------	----------	-------------------	----------	--------------------	----------	------------------------	----------	------------------------------	----------	------------------------------	----------	----------------------------	----------	--------------------------	----------	--------------------------------	----------	--------------------------------	----------	----------------------------------	----------	--------------------------------------	----------

◇ 目 書 行 刊 社 題 問 の 日 今 ◇

松	芳	片	藤	長	了	村	孜	林	天	鄉	小	二	久	房	經	三	康	石	賢	高	是	藤	銀	野	京	蓬	武	牧	元	
男	著	倉	著	川	著	田	著	著	沖	著	著	著	原	著	編	著	著	山	著	著	著	原	著	村	著	著	著	著	著	著
荒	木	日	本	裏	北	北	政	政	蔣	外	外	國	國	國	サ	日	日	金	金	半	半	産	産	軍	軍	軍	ど	ど	人	
木	貞	本	は	から	支	支	局	局	政	交	交	體	體	體	ラ	支	支	持	持	生	生	業	業	部	部	部	う	う	生	
夫	夫	は	イ	見	獨	獨	線	線	權	陣	陣	宣	宣	宣	リ	衝	衝	に	に	の	の	日	日	官	官	官	ら	ら	金	
と	と	英	タ	た	立	立	に	に	の	を	を	揚	揚	揚	ー	突	突	學	學	體	體	本	本	僚	僚	僚	す	す	儲	
阿	阿	米	タ	歐	運	運	於	於	日	め	め	と	と	と	何	必	必	ぶ	ぶ	驗	驗	の	の	政	政	政	ば	ば	け	
部	部	の	リ	洲	動	動	ける	ける	英	ぐる	ぐる	重	重	重	處	然	然	論	論	驗	驗	進	進	黨	黨	黨	い	い	修	
信	信	備	を	の	の	の	軍	軍	戰	軍	軍	臣	臣	臣	へ	論	論	ぶ	ぶ	驗	驗	路	路	黨	黨	黨	か	か	業	
行	行	よ	支	外	真	真	部	部	争	省	省	布	布	布	行	論	論	論	論	驗	驗	進	進	進	進	進	業	業	業	
價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送

長	了	三	康	永	三	永	三	永	三	永	三	永	三	永	三	永	三	永	三	永	三	永	三	永	三	永	三	永	三				
谷	谷	島	島	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井			
川	川	日	日	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現			
急	急	露	露	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代			
迫	迫	再	再	軍	軍	軍	軍	軍	軍	軍	軍	軍	軍	軍	軍	軍	軍	軍	軍	軍	軍	軍	軍	軍	軍	軍	軍	軍	軍	軍	軍		
せ	せ	び	び	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部	部		
る	る	戦	戦	論	論	論	論	論	論	論	論	論	論	論	論	論	論	論	論	論	論	論	論	論	論	論	論	論	論	論	論		
日	日	ふ	ふ	特	特	特	特	特	特	特	特	特	特	特	特	特	特	特	特	特	特	特	特	特	特	特	特	特	特	特	特		
ソ	ソ	か	か	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	
關	關	價	價	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	
係	係	一	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	
價	價	〇	〇	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二

◎既刊書御注文は、すべて前金にて御願ひ致します。御申込は本社直接又は最寄賣店へ。
 送金は振替又は郵便切手のこと。月報『今日の問題』『新刊通知』『直接購讀規定』御入用の方は御申出下さい。

パンフレット愛読者に急告!!

今日ではパンフレットは讀書界になくはならぬ存在となりました。新聞でも雑誌でも、もとより單行本でも得られない社會の事が急速に、簡単に、直截に、しかも、僅か十錢といふ安い値段で、或は旅行の車中で、或は通勤の電車の中で、或は僅かの休憩の時間に、何時、如何なる所でも、迅速、適切、公正なる知識が求められる所に、パンフレットの最大特長があります。

わが社は愛讀者各位の御期待に添ふやうに、常に時局への急速適切なる對應、内容充實、權威と信用とを唯一のモットーとして、編輯に多大の苦心と注意とを拂つて居ります。今後、各位の御鞭撻を御願ひします。

パンフレットは、毎月三冊以上發行致します。全國の書店、鐵道各驛賣店にて發賣して居りますが、地方で御不便の方、若しくは、殖民地方面の方は、是非本社直接の御購讀を御すゝめ致します。非常な御便宜があります。直接購讀の御申込は、其旨ハガキで本社へ御申込になれば、新刊の都度御送本致します。又、御住所、御氏名を御通知下されば、新刊通知、月報も差上げます。直接購讀規定御入用の方は御一報次第、御送り致します。

此際、切に直接購讀を御すゝめ致します。

國防研究會編

四六版百五十頁
並製清裝

特價二十錢

(送料二錢)

近代國防論

軍部の抱懷する國防觀と國防政策

◇近代國防とソヴェート・ロシア

◇經濟戰略・思想戰略

◇重壓下の日本と國防の強化

本書は讀者の御便宜のために、本社で今までに發行した陸軍省パンフレット収録のもの三冊を其のまま、合本収録して發行したものである。

軍部と國防問題に關する出版物の少い今日に於て、本書は必ずや各方面の御好評をうけるものと信ずる。特に目下國內の問題となつてゐる軍部の國防政策、國內改造政策を知るに唯一の資料である。賣切れぬうち即刻入手せよ！

特に『重壓下の日本と國防の強化』は、かつて陸軍省新聞班に於て發行され、世上論議の中心となつて、大問題を起した『國防の本義と其の強化の提唱』に更に其の重要なる前編をなす『躍進日本と列強の重壓』の二冊を合輯したもので、未だ其の其の内容を讀まれない方は、此の際、是非、御申込あらんことを。書店と驛賣店にあり、本社直接切手代用可。

今日の問題社

東京芝田區村町四十八番
振替東京五九七四八番

目下好評の新刊と重版

三島康夫著

日露再び戦ふか

新刊・好評
定價十錢(送料二錢)

長谷川了著

急迫せる日ソ關係

新刊・好評
定價十錢(送料二錢)

三島康夫著

日支衝突必然論

好評・二十版
定價十錢(送料二錢)

野村重太郎著

軍部・官僚・政黨

重版出來
定價十錢(送料二錢)

藤原銀次郎著

産業日本の進路

忽ち三十版
定價十錢(送料二錢)

國防研究會編

近代國防論

合輯版出來
特價二十錢(送料二錢)

高橋是清著

半生の體驗

新刊・好評
特價二十錢(送料二錢)

永井三郎著

現代軍部論

新刊出來
特價二十錢(送料二錢)

東京芝田區村町四の十八番
振替東京五九七四八番

今日の問題社

AM

245045

1/43



LIBRARY OF CONGRESS



0 020 208 718 8

356361

61
1



Jun 13, 2014

00202087188

[29] gendaigunburon008800

Library of Congress, Asian Division

11796843

880-01 Nagai, Saburo

Gendai gunburon



APRIL2013